

**2015年度CGSイベント報告**  
**第3回R-Week報告**  
 堀真悟  
 CGS研究所助手 / 準研究員

2015年6月1～6日（月～土）の1週間、CGS主催のもと、第3回「R-Week」が開催された。

CGSが展開する「R-Week project」は、ジェンダー・セクシュアリティを主としてICU学内で経験されるさまざまな問題に対して、学生自らがアクションを起こすことをさまざまな方法でサポートすることを目的としたものである。その一環としてCGSでは、毎年6月第1週目はR-Weekと銘打つイベント週間を開催してきた。第3回の内容は以下の通りである。

- 6月1～5日（月～金） R-Week連動学生有志企画「Sp [R] ead: あなたのRで、多様性をICUから『Sp [R] ead』しよう。」
- 6月1～5日（月～金） ダブルパネル展「ふわりんといっしょ ～ICUでも、ひとりじゃないよ～」、「多様な性、知っていますか？ ～あなたも私も、このまちで～」(東京都平成24年度地域自殺対策緊急強化補助事業)
- 6月1日（月） オープニングティーパーティー
- 6月2日（火） 講演会「学生の『問題経験』を考える  
 ー大学におけるハラスメント」  
 講師：湯川やよい（一橋大学大学院社会学研究科特別研究員）
- 6月3日（水） 講演会「『性同一性障害』のこれからを考える  
 ー医療モデルと生活モデルの視点から」  
 講師：針間克己（はりまメンタルクリニック院長）、  
 東 優子（大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類）
- 6月4日（木） 第24回「ふわカフェ」トークテーマ：リラックス
- 6月5日（金） 講演会「薬物を使う人はなぜ助けを求められないのか」  
 講師：倉田めば（大阪DARC）

## 6月6日（土）CGS主催同窓会「Rainbow Reunion」

今年から始まった新たな取り組みが、本館3階ラウンジでおこなったパネル展である。日比谷潤子学長やICU食堂スタッフの塩田かずこさんなど学内の教職員のLGBTサポート的な声を、パネル化して展示したのだ。同パネルは今後も使用し、内容もボリュームアップしていきたい。

また、講演会も充実していた。まず、ハラスメント問題の研究を専門とする社会学者の湯川やよいさんを招いておこなわれた「学生の『問題経験』を考える」である。ハラスメントを被る学生の問題経験を中心に据えた対策について再考するこの会は、ハラスメント対策に関心をもつ教職員の来場もあり、やや小規模ながら充実したものとなった。

ついで『『性同一性障害』のこれからを考える ―医療モデルと生活モデルの視点から』では、医師の針間克己さんとソーシャルワーク論を専門とする東優子さんが、医療モデルと生活モデルのそれぞれの視点から、「性同一性障害」をめぐる日本社会の近年の動向と今後について講演をおこなった。学外からの来場者も交えた討議は白熱し、結果的に初学者向けというよりやや専門性の高い内容となった。

そして「薬物を使う人はなぜ助けを求められないのか」ではピア・ドラッグ・カウンセラーとして活動する倉田めばさんを迎え、薬物依存者への社会的排除や刑事罰を自明視したこれまでの対応・予防策への批判的な問い直しを聞いた。学内でも薬物依存をスティグマ化する風潮が根強いなか、「ダメ絶対!」と連呼するのではない対策がいかに可能か。それは、CGSそしてICUが考えるべき喫緊の課題であることを再認識できた。

このほか、CGS主催同窓会Rainbow Reunionの開催も忘れてはならない。CGS関係者やpGSS（ジェンダー・セクシュアリティ研究メジャー）の卒業生は相当数にのぼるにも関わらず、CGS主催のもと集まる機会はこれまでになかった。また残念ながら既存の同窓会組織では、ジェンダー・セクシュアリティについての関心や話題が共有されることは皆無である。そこで初めて企画されたのがRainbow Reunionであり、今回は35名の参加者を得られた。異性愛主義や男女二元論がヘゲモニーを握る社会を生き延びるべく、CGSでは今後

も卒業生のネットワークづくりに継続して取り組んでいきたい。

さて、こうしたイベント週間の開催も3年目を迎えたわけだが、今年は昨年以上に学生からの注目度が高いように感じられた。とりわけ、「R」のボディペイントやロゴマークの写真をTwitter・Facebook上で拡散することで多様性をアピールする「Sp [R] ead」が、R-Week連動企画として学生有志の手で開催されたのは特筆すべき点である。

一方で、「Sp [R] ead」以外の企画準備を研究所助手で分担した結果、助手たちがオーバーワークに陥ってしまったことは反省すべき点である。R-Week projectは学生が主体となって運営されることを期待して立ち上げられたものだが、これまではその前段階として助手が運営を担い、R-Weekへの関心向上を図ってきた。だが、助手それぞれが業務を抱えるなか、次年度以降も同様の規模でR-Weekを運営していくことは難しい。学生の関心を次第に得つつある今だからこそ、R-Weekは誰が何のためにおこなうのかを振り返ることが必要だろう。

R-Week担当者として、この小さな大学ですら何かを動かしたり変えたりすることはかくも難しいことなのだと、あらためて痛感させられる。ただ、これまでのR-Weekがまったくの無意味だったとも思わない。2016年度、R-Week projectの担当者は変わり、R-weekは助手の負担が大きい1週間の集中開催から、複数週で開催されるR-Weeksとして新たにスタートする。そのなかでも、学生一人一人の問題意識や経験が出发点としてつねに大切にされることを願っている。時に非常に難しいことではあったが、しかしどんなに困難でも、それこそがR-Week projectの存在意義だと思うのだ。

**AY2015 CGS Event Report**  
**3rd Annual R-Week Report**  
**Shingo HORI**  
**Research Institute Assistant / Associate Research Fellow, CGS**

CGS hosted the 3rd annual “R-Week” from June 1st–6th (Mon–Sat), 2015.

CGS developed the R-Week project in order to support students who wish to take action against the various (mainly gender and sexuality-related) problems they experience on ICU’s campus. As part of that project, CGS holds an event dubbed “R-Week” for one week in June every year. The 3rd annual event proceeded as follows.

**June 1st–5th (Mon–Fri): R-Week Joint Student Volunteer Project**  
**“Sp [R] ead”—“Sp [R] ead diversity at ICU with your [R]”**

June 1st–5th (Mon–Fri): Double Panel Exhibition, “Together with Fuwarin—You’re Not Alone at ICU,” “Do You Know about Sexual Diversity?—You and I, Here in this City” (Tokyo Metropolis AY2012 Subsidy Program for the Immediate Strengthening of Community-Based Suicide Prevention Efforts)

**June 1st (Mon): Opening Tea Party**

**June 2nd (Tue): Lecture, “Discussing Problematic Experiences of Students—Harassment on Campus”**

Lecturer: Yayoi YUKAWA (Research Fellow, Hitotsubashi University Graduate School of Social Sciences)

**June 3rd (Wed): Lecture, “The Future of ‘Gender Identity Disorder’—From the Perspectives of Medical and Lifestyle Models”**

Lecturers: Katsuki HARIMA (Director, Harima Medical Clinic), Yuko HIGASHI (Osaka Prefecture University College of Health and Human Sciences School of Social Welfare and Education)

**June 4th (Thu): 24th Fuwa Café (Theme: “Relaxing”)**

**June 5th (Fri): Lecture, “Why Can’t People Who Use Drugs Ask for Help?”**

Lecturer: Meba KURATA (Osaka DARC)

**June 6th (Sat): CGS-sponsored Alumni Party “Rainbow Reunion”**

Our newest endeavor that began from this year is the panel exhibition held at the 3rd floor lounge in Honkan. We plan to use the same panels in the future, while increasing the amount of content.

The lectures held during the week were all rewarding. At the first lecture, which reconsidered measures for students who have experienced harassment, faculty members who were interested in harassment prevention also attended. While it was a small-scale event, it was also a fruitful one.

The next lecture, “The Future of ‘Gender Identity Disorder’—From the Perspectives of Medical and Lifestyle Models,” explored GID from the viewpoints of both medical and lifestyle models, within the context of recent and future trends in Japanese society.

Finally, in “Why Can’t People Who Use Drugs Ask for Help?” the lecturer critically questioned the heretofore treatment / prevention policies that regarded social exclusion and / or criminal punishment for drug-dependent individuals as self-evident.

Aside from these, the CGS-sponsored alumni event Rainbow Reunion was also held, with over 35 people in attendance. At CGS, we hope to continue creating networks for our graduates.

After three years of holding this event week, I felt that it gained even more attention from students compared to the previous year. In particular, the student volunteer-led "Sp [R] ead," organized as an R-Week joint project, deserves special mention.

It was regretful, however, that the RIAs who assisted in planning and preparing events other than "Sp [R] ead" ended up working overtime. It is necessary to reflect on for whom and for what purpose we are holding R-Week.

As the representative of R-Week, I was painfully reminded of how difficult it is to move or change things, even at a small university like ICU. Yet, I hope that the R-Week project will continue to be valued as an event that begins with each individual student's awareness and experience.